

7 'Face to Face' - The Art of Encounter - (by Peter F. Schmid)

* Brian Thorne & Elke Lambers 1998 *Person-Centred Therapy - A European Perspective* -

ロジャーズ BEG 勉強会・試訳 酒井茂樹

第7章 フェイス・トゥ・フェイス: エンカウターの実現 (ペーター・F・シュミット)

「人生も生活も、ひとつひとつすべてがエンカウター #1」(マルティン・ブーバー)

関係性の個人的なかたちとしてのエンカウター

援助関係で、もし他の人間[human being]を人格的なひと[person]とみなし、治療すべき、あるいは指導すべき対象のように考えないのであれば、原則として、モノを直すときのような接し方はしないだろう。《援助者[helper]》なら、クライアントとともに変容のプロセスに入り込んでいく。援助者自身は、個人的なレベルでかかわって巻き込まれるままにしておき、専門家の役割として、伝統的にしてきた保護を与えるようなことはやめてしまっている。だから、パーソンセンタード・アプローチでは、心理療法も、ほかの心理社会的活動と同じように、ひとが本質的に平等であることを前提とした、対人関係の一形式である。そしてパーソンセンタードでの最終目標は《個人的なエンカウター[personal encounter]》である。それは、ひととひとが向かいあって、直接コミュニケーションするときの、人間的な特質[personal quality]を表すような、かかわりあいのかたちである。《エンカウター[encounter]》という専門用語は、このような特質をあらわすものとして、神学や哲学から生まれてきただけでなく、心理学や心理療法でも深められてきたのである。現代的に《ひと[person]》という語からわかることは、その構成のひとつとして、他のひとたちに出会う、という特徴があることだろう。「《個人的なエンカウターのある仲間集団[community]》の中でだけ、ひとたちは成長できるのだ」(Tillich, 1956: 208)。

ロジャーズ本人は、セラピーをひとつのエンカウターと記している。そこでは、かかわりあいとセラピストの純粋性について、《かかわりあい[relationship]のエンカウターとしてのセラピー》(Rogers, 1956: 208)と考えており、そのようなことが治療の技術・理論・信念[ideology]に先立つものだと強調している。結果的に、パーソンセンタード・アプローチが伝えたいことは、「どのような種類のセラピーでも、多かれ少なかれ、セラピストとクライアントのあいだで、また集団療法や家族療法ではクライアント同士のやりとりも含めて、エンカウターしているところがある。しかし、エンカウターを理解しているような理論がたくさんあるわけではない。エンカウターは癒しの源泉であり、副産物などではないのだ」(Friedman, 1987: 11)ということである。とにかく、パーソンセンタード・アプローチでは、ひとのあいだでのエンカウターが基本であり、それはセラピー・プロセスや治療目標でもある。そして、ふたりのひとのかかわりあいは、グループでのかかわりあいと同じように考えられている。

私は、エンカウターの現象学についてアウトラインを示すことで、ロジャーズが個人主義[individualistic] 1 に偏っているという見方に対して、バランスをとっておきたい。関係性の側面は、ロジャーズが晩年になってから発展させた考えであったが、早期の系統だった理論によっ

て表明されたものではない。そして、そのころより、もっと個人的な経験からの説明だったと認められるべきである（ロジャーズ理論で言っていることは、初期のころから、ほとんどパーソンセンタード・アプローチと考えてよいが、のちになってその重大性に気づき、とくに、関係性の側面を付け加えた。しかし、理論的には統合できていない。この点をふまえて、ここでの発展を、パーソンセンタード理論として再概念化する必要がある）。とくに、パーソンセンタードでのグループワークは、直接そこにある、ひとのあいだでの、かかわりあいの中心におかれることで、人間のイメージ[the image of man]をつくり出した。つまり、ひとになることの意味が何であるかわかる、ということに深い影響を与えたのである。《エンカウンターグループ》という言い方は、関係性の人間学[an anthropology of relationality]を指し示している。それは、人間が集団のなかで暮らすという基本的な事実が、人間という存在の本性には不可欠であることをたしかなものにしている。

1 詳細は、シュミット(1994a: 103-295, with many references)やシュミット(1991: 105-212; 1994b)の中で取り上げられている。

#1 All real life is encounter (Buber, 1974: 18)の意識。植田重雄氏は「すべて真の生とは出会いである」(『我と汝・対話』岩波文庫)としているが、訳者は encounter を「出会い」とすると意味が限定されてしまうと想着て、en-counter の語源的意味を尊重できるように、大部分をカタカナで表記した。

エンカウンター[En-counter] - 語源とその意味 -

語源的にみると、英語の《エンカウンター[encounter]》は、フランス語の *recontre* と同じで、語幹にラテン語 *contre* をもち、《～に反対して[against]》の意味がある。またドイツ語でも同じように *Begegnung* は語幹 *gegen* [against] から成り立つ語である。

いずれも《against》を含んでおり、～に対する抵抗[*resistance*]や向かいあって[*vis-à-vis*]を指している。《エンカウンター》は、面と向かってあう[*meeting face-to-face*]ことから、古くは敵との出会いを、のちには友好的に[*friendly*]とか好意的な何か[*loving one*] 2 を意味していた(ドイツ語でも対応しているところがある。*begegnen* はあるひとが困難や敵に直面している状態を示すときに使われる)。ひとは対象[*object*]とエンカウンターする(景色や絵画など、《現実とのエンカウンター[*reality encounter*]》)。ひとともエンカウンターする(なんじのエンカウンター[*Thou-encounter*])、《ひとのあいだでのエンカウンター[*interpersonal encounter*]》)。ふだんの生活では、とくに意味を考えず使うこともある(偶然に出会ったような意味で)。一方、人格哲学[*personalistic philosophy*]、ここでの文脈では、《エンカウンター哲学[*encounter philosophy*]》とも言われるが、実存的な意味ももっている。

関係性とエンカウンターはどのように結びつけられるだろうか。関係性はエンカウンターに先立つものである。また、エンカウンターを通じて現れるもの、あるいは、エンカウンターに新しい特質を付け加えるものでもあるだろう。関係性はエンカウンターの結果であるのと同時に新しいエンカウターのきっかけも与える。関係性は態度を含んでおり、エンカウンターは経験することの独自さを含んでいる。そのように、関係性はエンカウンターを促進するものであるし、同じくらいに、エンカウンターからの結果とも考えられる。

2 シェークスピアは、1599年という昔に、a loving encounter の意味で使用した。

他者[Other] エンカウターの哲学

4章で指摘されたように、ひと[person]の概念は、人間存在[human being]という哲学の見方から、仲間[a fellow man]、なんじ[Thou]、他者[Other]、《エンカウターした何か[encountered one]とみなされるが、それらは12世紀になってはじめて受け入れられたことであった。このような哲学でのパラダイムシフトは、エンカウター哲学を生み出しただけでなく、結果的に、人間科学にも多大な変革をもたらした。

エンカウター哲学の重要なルーツのひとつが、ユダヤ系キリスト教徒の伝統にある。慈善[charity]はもともとユダヤの習慣であったが、イエスは同族のひとや同郷のひとを越えて、どの人間のためにも、という愛にまで広げた。そこには一番距離の遠い人も含まれており、他者は(愛を通じて)兄弟になる、と考えられた。それは、とくによきサマリア人の寓話(ルカ 10: 29-37) #2でははっきりと示されている。聖書での兄弟愛は、神の万物愛であり、すべてを平等にみるという愛である。そして自らを《小さき者[the least]》にたとえられた。人間が兄弟を大切にするとき、小さき者も大切にされる。現実にある兄弟愛の中で、人間は神とエンカウターするのである。そのことは最後の審判(マタイ 25: 31-46)の寓話で示されている。《わたしの兄弟のうちもっとも小さき者のにしたことは、私に対してしたことである》(マタイ 25: 40)。

いくつかの例外(例えば、愛を第一とするアウグスティヌス #3)を除いて、長いあいだ、キリスト教哲学のような根源を追求する方法が受け入れられてこなかった。トマス・アクィナス #4が指摘するように、それは哲学に認識を第一とするギリシア人の思考法が入ってしまっているためであった。もしこの時代にパラダイムシフトが起こらなかったら、他者を倫理上避けられぬ者と考えたカントは現れなかっただろう。弁証法のヘーゲル、感情移入の理論家や現象学者(例えば、デュルタイやフッサール)、実存主義哲学者(例えば、キルケゴール、ハイデガー、ヤスパース)も同様であったが、彼らの出現によって、他者を考えるような哲学が整理されたのである。ただ、どの哲学者も多少なりとも、私[I]を出発点とみなしていた。ブーバーやエーブナー、ローゼンツヴァイクらは、(対話主義[dialogism]、人格主義[personalism]といわれる)、エンカウター哲学を提唱して、《新たな対話的思考[new dialogical thinking]》を展開していった。そのように表現した理由は複雑であるが、おそらく合理主義やドイツ哲学の理想主義に対する反動である。それは、私[the I]が孤立するということへの落胆、また、孤独化、疎外化、物質化、機能化されてしまった現代生活への失望でもある。自然科学によって機械化された世界観は、社会構造をわかるようになってきたが、結果として、宗教の意味を衰えさせてきてしまった。そのようなことへの反動とも考えられるだろう。

#2 この個所でのサマリア人の寓話は隣人愛を示すものである。

#3 アウグスティヌス(354-430、初期キリスト教会最大の指導者): 三位一体論や自由意志論を展開。はじめ善悪二元論のマニ教を信奉していたが、その後ギリシア哲学などさまざま学び、32歳でキリスト教へ回心。人間は魂と肉体からなる理性的実体であるとし、自分自身に立ち返るという方法で、自分自身の奥に神を見た。そ

して、三位一体を問い求めることは「愛」を問い求めることに匹敵するとしている。

- # 4 トマス・アクィナス(1225-1274, 神学者。中世最大の哲学者): 有と本質や真理について探求。聖書の教え(当時はアウグスティヌス主義が主流)とギリシア哲学(アリストテレスの著作が翻訳された時代)を調和させようとする試み(ラテン・アヴェロエス主義)は難問を抱えており、様々な問題があったが、それらの妥協点を検討した。

対話の人間学[dialogical anthropology]からのアプローチ

ロマーノ・グアルディーニ(1885-1968)はエンカウンターを、他者のリアルとの驚くような出会いと表現した。エンカウンターとは自身に対極のもの[the opposite]の本質から触れられたことを意味する(Guardhini, 1955)。そしてそれが起きるためには、目的をもたないようなオープンさと、驚くことにつながるぐらいの距離と、自由なときの人間の自発性が、条件として不可欠である。つまり、エンカウンターはつくり出されるものではない。その瞬間、触れることと触られることの両方が同時に起きるときに生まれるのである。ひとのあいだでのエンカウンターをしているとき、親密な感じ[affinity]と疎遠な感じ[alienation]を同時に体験するだろう。エンカウンターはアドベンチャーであり、何かが生まれてくるような、新しいことへ飛躍するような部分を含む。かわりあい《他者といるときの主なもの》である。そのとき、自身を他者に向けたようなリスクの中であって、自身を過去のものとして前進する。そして、どこからかやってきた者に出会うかのように、自身に改めて出会う経験をする。そこにエンカウターの弁証法的な特徴がある。つまり、自分自身を行くがままにさせられるひとは、自分自身を新しいものとして発見するだろう。まさにそれが 自己実現[self-actualization]の働きである。

ポール・ティリッヒ(1886-1965)は、ロジャーズとブーバーの対話と同じように、公開の対話をしている(Rogers and Tillich, 1966)が、他者とエンカウンターするなかでの抵抗[resistance]からひとは立ち現れる、と述べている。

もし、ひとが...他者の自己[self]による抵抗に出会わなかったら、どのような自己でも、自身を絶対的なものと扱うだろう.....個人[individual]は物の世界すべてを征服できる。けれども、人格[person]を壊さずことなく、もうひとりの人間を征服できない。個人はこの抵抗によって自分自身を発見するのだ。もし他者の人格を壊したくないのであれば、他者との交流の場[community]をもたなければならない。このように、他者の人格から抵抗されることによって、人間[person]は生まれるのである(Tillich, 1956: 208)。

ベルンハルト・ヴェルテ(1906-83)は、《エンカウターの実現[art]》は、ことば[words]と応答することば[counter-words]のあいだにある愛情に満ちたもがき[a loving struggle],あるいは、想像力豊かなふるまい、とみなしている。自分自身をエンカウターにつれてくる中で重要なことは、《接触した瞬間での》弁証法的なぶつかりあいによる目覚めであろう。それは自分自身を開き、自分自身を表に出すこと、言い換えれば、《あなた自身があなたをあるがままにさせること[to let yourself be you]》(Welte, 1966)である。

ガブリエル・マルセル(1889-1973)は、他者は先立っていつもそこにいた(1928, 1935)と強調する。それはただ、(身体的な意味での)私であるような他者[other than I am]とのコミュニケーション

ンでのことである。(私があなたに話しかけている客体[object])**それ[He]**に応答するような力はない。私が応じるべきあなたに **あなた[you]**が応答する。私たちは客体のことで話をするが、あなたが客体なのではなく、それ以上の、何かを求め[invocation]、そこにいる[presence]存在である。私が信じるべきあなたといるとき 物事[objects]を私は判断できる。あなたへは、ただ愛によってのみ、近づけるようになる。このように、マルセルは身体の客体化[objectification]に対して、強く反対するのである。

フレデリック・J・J・ボイトンディク(1887-1974)は、ゲームとエンカウンターの間が、近さと遠さ、開示と沈黙のあいだの振動[oscillation]によって特徴づけられる、としている(Buytendijk, 1951)。ひとの対極にある何かとの愛情に満ちたエンカウンターは、遊びであっても本気であっても、お互いに何かを提供しあうこと[reciprocity]と対等であること[equality]が必要である。ほとんど完全には実現できないことだが、彼はこのようなことを強調している。

ブーバーによる《われ なんじ》 自身が他者といえるようになる時エンカウンターは起こる

マルティン・ブーバー(1878-1965)にとって、ひとになることは、エンカウンター、あるいは対話といった、自身をコミュニケーションしようとする出来事から生み出されている。有名なことば《人生も生活もひとつひとつすべてがエンカウンター # 1》(Buber, 1974: 18)では、現実に、われ[the I]は他者とのエンカウンターにより成り立つとされる。《われはなんじ[the Thou] # 5 により、わたし[an I]になり、わたしはなんじと呼びかける》(同書)。エンカウンターは、自身[one]が他者とそこにいるようになったときの出来事とみなされる。それは、(うわべだけの侵襲的なことではなく)、誠実であること[authenticity]によって特徴づけられる。つまり、受容すること[acceptance] (ひととしての他者にイエスと言うこと。そのひとの存在にただ気づくのではなく、受け入れ、確かめること)、内側に入れること[inclusion](他者を経験すること、他者に同調すること)、わかってあげていること[becoming aware](個人的な現実となること。具体的・典型的・個性的なあり方で、他者に対して開かれていること。客体として他の人間を観察するのは対照的なこと)を通じて、エンカウンターするのである。

われ - なんじ関係は、自分自身[the one]や他者[the Other]、あるいは、その両方を含んだ中立の世界で生まれるのではなく、ひとたちが関係しあうことのできる唯一の次元、《他者の客観的側面と主観的側面、われとなんじが出会うその狭きところで # 5》(Buber, 1982: 167)で生まれるのである。ブーバーはこの領域[sphere]を、《(ひとの)あいだ》[the inter(personal), *das Zwischen(menschliche)*]と名づけた。対話のリアルさは、それぞれの個が関係しあう以上の、個々の総和以上のものである。どちらの側面もより大きな領域の一部であって、《あいだ》[*Zwischen*]と呼ばれている。関係しあうひとたちのあいだでの《身体相互行為》[physical interplay, *leibhaftes Zusammenspiel*]ともブーバーは記している。さらに、《ひととひとのあいだ # 7》[*Zwischenmenschliches*]で明らかになっていくさまを、心理学的なものと対比して、対話的なもの[dialogical]とみなした。《ほんとうの対話》[real dialogue]、相互的になることを目指したやりとりは、ひとの実存的中心から生まれるという。それは、情報交換の問題ではなく、他者の実存に加わり、他者の実存を分かちあうことである。コミュニケーションが、対話に変わるためには、お互いの反応[reaction]が必要であり、会話の中でコミュニケーション自体を知るための要素も必要になる。ブーバーは《私には教義[doctrine]はない。しかし、私は対話の中にいる》(1963: 593)

と述べているが、それが彼自身のわかっていたやり方だったのである。

ブーバーの哲学の中で、ロジャーズが認めていた類似点をみると、私たちはたくさんの部分で暗礁に乗り上げてしまうことに気づかされる。それらは、昔から繰り返し引用されてきたし、まだ完全に追求しきれてはいないが、パーソンセンタードのひとの考え方、関係性の考え方に深刻な疑問を投げかける。その疑問は 1957 年に行われたブーバーとロジャーズの対話ではっきりとさせられた。残念なことに、表面的で性急に両者の考えを合わせようとする結果となってしまった。それは、ロジャーズとブーバーの主張が単純に同じものとして、それがどこか探そうとしてしまったためである。もしブーバーの言っていることが人格成長に必要な条件を想起させるようなものだったとしても、両者の考えには、単純に比較できるところがなかった。《ロジャーズ＝ブーバー哲学の実践》という図式で性急に同一視したりせず、代わりに、ロジャーズのスタンスを批判的に検討するために、ロジャーズとブーバーの哲学や他のエンカウンター哲学者を比較することや、それらを発展させるために、とくに、ブーバーが注目していた、治療的關係は非対等であることの説明を求めることで、意味がよりわかってくるのである。

- # 5 「なんじ」はドイツ語の du; Du であるが、親子・兄弟・夫婦・親友などの特別に親しいものの間、神に対して用いられる親称。同じく相手をさす Sie は自分とのあいだに儀礼的な距離を置く敬称であり区別されている(参考: 平石, 1991)。
- # 6 児島洋氏の訳は「主観性の彼方、客観性の此方、我と汝が会おう狭き尾根の上に、間の国は存在する」である(ブーバー『人間とは何か』理想社を参照)
- # 7 das Zwischenmenschliches は、「人間と人間との間」と訳されている(平石善司『マルチン・ブーバー』創文社を参照)。

レビナスによる《なんじ われ》 人間の三一性の中で、そこにある共通の限界を超えるようなエンカウンター

エマニュエル・レビナス(1905-95)による人間学の前提は、ブーバーよりも強い言い方で、《絶対的に異なる 存在》[absolute being-different]としての他者である。ブーバーが自身のアプローチを心理学に意味を与えるもの[meta-psychology]と考えていたのに対し、レビナス(1978, 1980, 1992)は存在論に意味を与えるもの[meta-ontology]ととらえていた。レビナスの方法は、エンカウターの経験から、すべての科学の土台となる倫理学[ethics]へ向かっていた。他者との接触[contact]から生じた応答の責任[responsibility]がはじめにある。自身を とらえられた 存在[being-caught-in-oneself]として、その全体性からの目覚めは《独立した存在》[being independent]を通じて起きることではない(自身がどれほど依存的な状況に置かれていても、である)。たしかに、他者には自分自身[oneself]からわれ[the I]を自由にする力がある。例えば、他者はわれの視野になく、われは他者の目に映る。その動きは、なんじからわれに向かってくる。この他者は呼びかけるひと、挑発するひとであり、そのひととの関係性は、**原則的に**、非対等である。(他者は要求する者であり)、他者によって呼びとめられた実存[the being]から、基本的な支援[diakonia]が生まれてくる。ただ応答することによって、わたしはわたしの義務を果たす。つまり、人びとがお互いに背負っているもの、それが愛である。このように、対話の中でのエンカウンターは、自分についての意識[self-consciousness] が生まれるための必要条件となる。それは(全体

主義的な)現状にある共通の限界を超える,後戻りできないような始まりをつくり出すための条件である。最後の最後で出発点に戻ったユリシーズ#9ではなく,二度と帰国することなく未知の世界へ旅立ったアブラハム#8のような寓話,そのことをよく象徴しているだろう。

ブーバーは,ひとがどのようなものであるか,という問を立て,ひとの対話的本性を,実存する二者[being-two]が対等に関係しあうと理解するところから探求をはじめたが,レビナスは他者[other]を他のひと[others]にまで広げて考えた。わたしと他者,わたしの仲間のひとは,独立した存在[entity]ではない。そして,その者自身が仲間のひとという,第三者[the Third One],すなわち,他のひとたちが存在する。結果的に,どのようにふるまうかが明らかにはならず,他のひとたちのあいだには,公正さの問題や判断の必要性が生じてくる。そのとき,私たち[We]についての新しい考え,われわれ二人の私たちではなく,われら三人の私たちという理解が生まれ,われわれ二人は誠実さをもって,ふたりだった世界に第三者を入れるようになる。このように概観することで,三一性[tri-unity]がひとのあいだ[interpersonality]の土台になっていることがわかる。二者という二元性[duality]の発想でも,二者関係を超越することがグループに向かわせるので,第三者は排除されるどころか,第三者のひと[him or her]を含めた形で考えることになる。

#8 アブラハムは旧約聖書に登場するイスラエル民族の始祖。

#9 ユリシーズはトロイの木馬を発案するなど活躍し,ギリシアの勝利に貢献したが,トロイアに味方する神々の怒りをかい,戦争終結後,10年間に渡り放浪させられてしまう。その途中で部下を失い,最期には一人で故郷にたどりついた。

エンカウンターでの人格成長 ロジャーズとパーソンセンタード派によるエンカウンター

関係性は,クライアントセンタード・アプローチ 3では初期のころから,重要な役割を果たしてきたことは事実である。しかし,セラピストの存在意味は,《没個人化[depersonalized]されたもうひとりの自己 [alter ego] #10》(Rogers, 1951: 208)という理解から,エンカウンターにおけるパートナーという理解へと時間をかけて徐々に展開された。この展開には,ブーバーや実存主義哲学との交流や,《ウィンスコンシン・プロジェクト》(Rogersら, 1967)での重度精神障害にあるクライアントとの出会い,治療目的ではないエンカウンターグループの経験などがよい影響を与えた。結果的に,ロジャーズは,オットー・ランク 4が使っていた《エンカウンター》という語をよく使うようになった。

治療的關係性について,1955年にロジャーズは次のように記している。「私は自身の危険を冒しても……私自身を關係性の直接さにふれさせる……そうした瞬間に,ブーバーから援用した表現になるが,リアルな《われ なんじ》關係,つまり,クライアントと私のあいだに,その経験の中に時間を超越した生が存在している。それは,クライアントや私自身を対象として扱うことの対極にあるのだ」(1955: 268f.)。1961年,エレン・ウェストのケースでは,ブーバーが使った意味で,治療の中心概念としてエンカウンターによる癒しを説明している(Rogers, 1961b: 175)。1962年の論文《The interpersonal relationship: the core of guidance(ひとのあいだでの關係性: 導きの核)》では,セラピストの一致[congruence]に関して記述されたのであるが,そのとき以来繰り返し頻りに主張してきたように,その關係性は《クライアントとの直接的で個人的なエンカウンター,差し向かいでセラピストと出会うこと》としている(1962a: 90)。

1957年、ミシガン大学での対談では、ロジャーズが考えていた、治療的な関係性でもっとも効果的な要素が《われ なんじ》概念と一致しているかどうかを、直接ブーバーに質問することとなった。ブーバーは、セラピストとクライアントの役割が、本質的な違いの最たるものだと指摘した。《そのひとは助けを求めてあなたのところにいる。あなたは助けを求めてそのひとのところにいるのではない》(Rogers and Buber, 1994: 15)。ロジャーズの考えでは、クライアントの実存的世界の中を、セラピストとクライアントは互いがともに出会っている。ブーバーはそれが、ただセラピスト側からもたらされた、一方的なエンカウンターであると考えた。さらにロジャーズの概念とのあいだには《決定的な違い》があり、「あなたが言うようにすべてが天国によって成り立っているわけではでないと思う。すべて地獄のようなときがあることも私は言っておきたい」(同書: 29f.)ということだった。そのことに対してロジャーズは、エンカウンターしているときの援助は、副産物のようなものであることを強調した。「私はあなたをわかりたい。あなたはどんなひとなのだろう…。あなたが直面してきた生活の中で、背負ったすべてものの背後に隠されているあなた…あなたは誰なの？」それがもっとも重要な部分である。そのとき援助したいなどと思っていない。ただ、そのひと自身[a person]に出会いたい、という情熱があっただけなのだから。「私は経験から学んだのだ。私たちが出会えたとき、助けになれることが起きた。それは副産物だった、と」(同書: 30f.)。

はじめのうち、ロジャーズは治療的な関係とブーバーのわれ なんじ関係を単に全く同じものだとしていたが、のちになって、類似点をあげるときは、いつも気を使って表現していた(例えば、Rogers and Polanyi, 1966: 197)。ロジャーズ自身、その考えの展開について、次のように記している。「ブーバーの言い方《われ なんじ関係》は、重要な意味をもっていたと再認識できる。それは、クライアントセンタード・セラピーにおいて、もっとセラピストの自己、セラピスト自身のきもちを使うこと、もっと純粋性を強調できることに思い至るからだ。しかも、これらすべてのことは、セラピストの視点・価値観・解釈をクライアントに押しつけることなく行える、ということの説明になっている」(Rogers, 1974: 11)。さらにロジャーズは、セラピーのゴールは、他のひとに対してもっとオープンになることとした。そのように調和がとれれば自己一致[congruence]は生まれてくる。そして次第に、セラピーの概念がエンカウンター指向に近づくようになっていったことを認めている。

ロジャーズは、自身のエンカウンターグループのプロセスを解説する際に、《ベーシック・エンカウンター[basic encounter]》を直接的な定義はしておらず、「それは、もっとも中心的で、情緒的で、変化の 生み出されるような、グループ体験の一側面として起こってくるもの」(Rogers, 1970: 33)というにとどまっている。しかし、その例として、ひとのあいだでの情緒的な関係を取り上げて、それがふだんの日常生活に比べて、より身近でより直接的な形での触れあい[contact]になっていると解釈した。そう考えると、エンカウンターには瞬間的、直接的な相互関係が含まれている。そして、「グループの中では、ポジティブなものでも、ネガティブなものでも、私の《表明したきもち[my owned feeling]》と参加者のきもちとが、じかにやりとりするときには、私が最高に機能する[my functioning best]ように想っている。それは、私にとって、個人的な意味の深いレベルで、私たち[we]がコミュニケーションしている、ということの意味するのだが、その瞬間を、私が《われ なんじ関係》にもっとも近づいた状態といえる」(Rogers, 1971a: 278)。

一方、他のパーソンセンタードの著作者たちもまた、エンカウンター哲学とのつながりに着目

している。Jim Bebout は論文「触れあいとしてのエンカウンター[encounter as contact]」(1974: 372-4)で、エンカウンターは、触れる触れられることであると、この点についてはっきり強調する。疎外[alienation]されているときは、反対のことを意味するが、距離的な隔たりがあり、《直接的な親密さ[direct intimacy]》という触れあいはできない。この文脈で Bebout は、サルトル、プレスナー、ポランニ、ストラッサーを意識している。また、パーソンセンタード心理療法にかわる《エンカウンター・セラピー》という名称も提案している(Bebout 1974: 372f.)。Bill Coulson(1973: 205)は、エンカウンターを《予期しない何かに出会うこと》と読み替える。Hans Swildens(1991: 53)は、「エンカウンターは触れあい以上のものだ...言い換えれば、わたしとあなたがそこにいる状況について共有すること...それは、仲間集団[community]での経験自体の問題である。そこでは、わたしとあなたは、もはや掛けがえられるものが何もなく、ともに私たち[We]を経験している。それを、私たち 経験[a We-experience]という」。ドイツ語圏の国々でも、Arnold Mente(1990)や Wolfgang Pfeifer(1989, 1991, 1993, 1995)などのあいだでは、個人的な出会い[personal encounter]を強調するし、Reinhard Tauscht と Anne-Marie Tausch(1990:16)もまた、《エンカウンターグループ[Begegnungsgruppe]》という表現を使っている。

ここでは名前を挙げるにとどめるが、サイコドラマ[psychodrama]の創始者モレノだけでなく、ピンスワンガーや von Weizaecker, Trueb らの深層心理学における人格主義運動[personalistic movements]や、Hycner, Friedman, Fuhr らの対話療法[dialogical therapy]でもまた、エンカウターの概念が中心的な役割を果たしている。

3 早くも 1940 年にクライエントセンタード・アプローチの誕生をみてとれる。ロジャーズは演説のなかで、「この方法ではじめて、成長を経験するような治療的関係それ自体が強調される。他のどの方法でも、クライエントは、面接時間が終わったあと、成長し、変化し、よい意思決定をすることが望まれている。ただ、その治療的なやりとりは、それ自体が成長する経験だといえる。いくつかの点で、私は、このことがどの治療法でももっとも重要なところだという気にさせられる」。

4 より詳しくは、シュミット(1994a: 173-80)を参照のこと。

10 他我 自分の中にある個体意識の統一体としての自我に対して、他人の中にも同じくあると推測される我のこと。

そこにいる中での純粋な愛のかけひき エンカウターのパーソンセンタード的理解

さて、私たちがパーソンセンタードの視点に立つとき、エンカウターの質とはどのようなものだと考えられるだろうか。

それぞれのエンカウンターは、リアルさに出会うこと[meeting reality]と触れられること[being touched]が、対極にある何か[the opposite]の本質と関係している。そこにはいつも、予期しない、驚き、といった特徴がある。操作的にできないし、使い古されることもない。それは天の恵み[gift]のようなものである。スタート地点では、分離していて、距離がある。対極にある何かと出会い、そこに抵抗[resistance]が生まれる。《エンカウンター[en-counter]》の原義が指し示すように、直面することなしに、エンカウンターすることはない。

人間的なエンカウンターでの対極にある何かは他者である。もうひとりの自分(他我)ではなく、

前からいる親しい友人でもなく、そっくりさん[identifiable person]でもない。まさに《私たちを眠らせない絶え間ないなぞ[a continuous enigma]》(Lévinas, 1959: 120)といえる。しかし、他者は名の知れない通りすがりの者ではなく、**なんじ**として、わたしの目の前に現れる。ひととしての他者は、私たちの知識の限界を打ち破る。それ以上に、モノ[a thing]のように扱われていたヒトは、沈黙や伝え返しのようやりとり[reflection]の中で、一段と見えるようになってくる。《なんじのために》 現代的にもっと正確に言えば《あなたのために[for you]》 は完全には不可能である。つまり、あなたはモノと共通する性質以上の何かをもっていない。だからこそ、(単に出来事を)知ること[knowledge]ではなく、**わかりあうこと[acknowledge]**が必要なのである # 11(《知ること[to know]》の古い意味には性的な接触というニュアンスがあった。わかりあうこと[acknowledging]ではこの意味がいつそうみられない)。エンカウンターはたしかに事実を知ることが目的ではない。たしかなことは、わかりあうことは愛と同じであり、われとなんじがひとつの状態で起きる。そこで私たちは相互に他者としてお互いを経験している。ひとつになること[oneness]で、他者であること[otherness]もまた深まってくる。なんじがかかわること[Thou-related]で、ひとりであること[independence]ができるようになる。ひとの対極にある何かは、ひとになること[becoming a person]をヒトに教え、仲間意識[community]を芽生えさせる。

コミュニケーションのもっとも適切な形式は**対話**である。(少なくともある種の)やりとり[exchange]があるという感触をもちつつ、《直面した何かをわかること[understanding confrontation]》、つまり、お互いのためになること[reciprocity]を目指すものである。だから、エンカウンターでは、仲間意識と孤独感が分離したもの[separation]ではなく、つながったもの[connection]になっている。その結果が《対話での緊迫感[dialogical tension]》である。しかし、対極にある何かと仲間意識あいだにあるこの緊迫感を緩めたかったり、耐える代わりに軽くしたくなったりする。そのような誘惑に対抗することは、いつでも新しいチャレンジである。対話での緊迫感の中にいる、すなわち、完全に - 他者と - 同じ方向に - いる(連帯意識[solidarity])と完全に - 自分自身で - いる(自律性[autonomy])ときに、自己 実現[self-actualization]は起きるのである。その動きはつねに、なんじの方から、発達のな見通しを持って生まれくる。まさに呼びかけ[the call]といえる。他の人間がいて、応答が生まれるように話し掛けてくるとき、私たちは自由とリスクに向かいあわされる。ただ、エンカウンターにもいくらか範囲があって 5、対話でのエンカウンターを経験したいと想ようになる以前から、エンカウンターはずっと起きている。だからこそ、エンカウンターにはいつでも、**呼びかけに応じる[response to a call]**という面がある。応答[response]から責任[respons-ability]という意味は派生するが、根拠として、自分の変わりとなって応答できるひとは誰もいないという事実がある。このようなところで、エンカウンターの倫理的な側面も示されている。

《心理療法での瞬間瞬間のエンカウンター》(Rogers, 1980: 2155)は、直接そこにいる中で起きている。このことは、《プレゼンス[Gegenwärtigkeit]》という実存的な態度に相当するが、(それはいま ここでというスローガン以上の、たくさんのことを意味するような)人生や日常での、そこにいる瞬間に参加することを指している。ロジャーズは晩年になって(例えば 1986 年ごろ)そのようなことをたびたび口にしていたが、とくに、少し変性意識状態のような、ひとの成長に向う媒体であるような状態として、セラピーの自己超越的な側面を書き残している。ブライアン・ソーン(1985)はこのような流れを、ロジャーズとは別の《テンダネス[tenderness]》という概念で

表し、治療的態度の第四条件としての考察を重ねている。エンカウンター哲学の観点によれば、プレゼンスはそこにいる[*to be*]ということへの誠実な態度である。そこにいる中で十分に生きることとは、条件をつけず他者を受容し、共感的にそのひとがいることに関わりをもつ。どんな意図もはじめからもったりせず、そこで経験される何か 6 に、心を開き[*openness*]、関心[*wonder*]をよせているような状態である。

直接さ[*im-media-cy*]は、《墮落[*decay*]》(Buber)のように、私たちを分断するような、あらゆる媒介手段[*mean*]が不必要で無用になるという出来事の中で立ち現れる。ここで重要なことは、第一に、偶然起ったことや出会ってしまったことから身を守り保護するために使っている、あらゆる技法や方法、すべての手段を使わないで、ということである。そのため、エンカウンターはあらゆる方法論を越えたところにある。それは、かわりあいの経験がもつ直接さに含まれた、親密な瞬間である。

個人的なエンカウンターには、もうひとつ、身体接触[*bodily contact*]という構成要素がある。エンカウンターするためには、身体がそこにあって、触れること、感じ・感じられること、《身をもってする相互行為》(Buber)が必要条件である。そこでは親密で官能的なことが起きる。自然のなせるわざによるエンカウンターは、かけひき[*game*] ルールのない、心からの、たわむれ、空想とは違う 意図的ではないふるまいを指している。そのときのひとは相互 行為者[*inter-actor*](Moreno)である。エンカウンターは、自分からの創造的なふるまいや活動であり、献身的な行動[*devotion*]でもある。活動性と受動性があり、取りに行くこともあれば、受けながすこともある。ルールのない誠実な《愛のかけひき[*game of love*]》(Thomas, 1969)の中でエンカウンターは起きている。エンカウンターを通じて、ともに いることで、人間の本質的な深さをもつ仲間としてのひとははっきりとしてくる。エンカウンターは、ともに いるという感覚のなかにいることであり、他のひと とともに 生きるという感覚の中ですごすことでもある。それは、ロジャーズが表現したような《あり方[*a way of being*]》のことだけでなく、《ともにいる方法[*way of being with*]》 7 のことでもある。けれども、《ともにいること[*to be with*]》は《ためにいること[*to be for*]》も意味しており、連帯意識をともなっている。セラピーやカウンセリングは、このような根源的な事実を象徴するものといえるだろう。

だからエンカウンターでは、最良の愛[*love*]によってほどよいコミュニケーションになる。とくに愛の中にあるとき、エンカウンターすることは、二者という二元性・ふたりを超えて、第三者[*Third One*]に開いている。そうして、私たちはふたりだけの世界ですごさなくなり、他のひとの世界ですごせるようになる。われ なんじの共時性、一方的なやりとり、疑う余地のないふたりの親密さを超えて、関係しあうなかで、歴史を生み出す方向にエンカウンターは動いている(Lévinas)。自己超越という意味での、自己の経験自体もまた二者 一体[*dual-unity*]を超えることである。そのため、二つ以上の多元な[*plural*]ときは、エンカウンターに向う本質的な状態である。つまり、二元性を超えること、第三者・グループに開かれていること、エンカウンターできるだけのスペースを与えてくれるような仲間集団[*community*]をもつことにつながっている。完全に互いに[*full together*]とは、われなんじのような身内の親密さの向う側にあって、私たちの中に、互いに いること[*being-together*]の中に起こっている。そこには自由の源泉がある。そのことは意思決定や正義の必要性を生み出す。そして、愛し合うこと[*make love*]はともに 愛すること[*love-with, condilectio*] # 12 につながる。誰のことも道具や手段とはみなさない。どのひとに

とつても出発地点であり目標地点である。活発なふたつ以上の多元性[plurality]が、差異性と同一性が、弁証法的なぶつかりあい[dialectic]、疎外感や孤独感を乗り越えるのである。

11 訳者の次のように解釈した { 知ることは物体とのわれ それ関係を指し, わかりあうことはひととのわれ なんじ関係を指している。後者はひとのあいだに生まれてくるやりとりや相互作用を含んでいる }

5 ことばの意味を明確にするために区別しておかなければならないことだが, 生まれたての赤ちゃんが経験するような《最初のなんじとの エンカウンター [Thou-encounter in the beginning]》と, やりとりを通じて可能になるような《個人的なエンカウンター [personal encounter]》(他者の呼びかけに応じるような相互のエンカウンター)は別ものである (後者のやりとりには, 自由と責任に向うように, われ・世界・なんじを識別したり客体として扱ったりできる能力も含まれている)。もし, 母子関係が最初のエンカウンターのためのパラダイムだとするなら, 男女関係における愛は個人的なエンカウンターに向うパラダイムだといえる。

6 プレゼンスの現象学やその意味の探求で, パーソンセンタード・アプローチの発展にかかわるものは, シュミット(1994a: 201-78)でより広く取り上げられている。

7 例えば, ロジャーズ(1975: 4)あるいはジェンドリン(1970: 82)。「人間はいつも《ともに - いる [being-with]》」

12 ここでは { 完全な愛 } のようなニュアンスが含まれていると考えられ, { 互いに大切にすること } と訳すほうがよいかもかもしれない。

セラピーでのエンカウンター, グループでのエンカウンター

人間がエンカウンターすることは, そのひとに, 自身が成長するための余地と自由を与える。自身の可能性によって, なることのできる何かから始まり, やがて, 完全にそのひとらしくなる。特定の目標などの手段をどのように使っても, あるいは, いかなる意図をしたとしても, このことはその対極にある。他方, 同じように, 役割や機能という考え方に基づいた相互作用もその対極にあるといえる。エンカウンターには危険と勇気の意味が含まれている。でも, チャンスということもできる。個人的なふれあいがもたらす天与の何か[gift], 完全な人間性[personhood]が現実になりそうな機会がそこにはあるのだから。

パーソンセンタード・セラピーは, はじめから簡単に, 個人的なエンカウンターになっているのではない。しかし, そうなることを目的としている。仮に非対等な人間関係であったとしても, 《治療的なエンカウンター [therapeutic encounter]》は互惠的であるし, 少なくとも互惠性に対してオープンである。情緒的な状況は同じではないかもしれないが, 等しく尊厳をもったもの同士の関係性だといえる。はじめのうちは, セラピストが個人的なエンカウンターを提供する側としているだけかもしれない。その意味では, セラピストのエンカウンターになっていることが, まだクライアントの方では互惠的にはできていないだろう。しかし, 治療的なプロセスのゴールは, いっそう完全な 相互的で対等な 個人的なエンカウンターをすることである。どちらのひともお互いに向かいあうなかで, ひと同士として自由に, そして, お互いの責任にはっきりと気づいているなかで, これから, 他者として, そのひとはそれぞれをわかりあうようになってくる。

そのようにして、ひと同士としてお互いに、そこに いる，よくなるのである。だから，セラピーの最終的な目標は，治療を克服して終えることであり，お互いがエンカウンターできるような所にあることである(例えば Schmid, 1996a)。エンカウンターのもつ自然の性質は，グループに一方的な関係性を乗り越えさせようと作用している。それは，セラピストとクライアントの厳密な線引きは存在しないためである。

エンカウンターとしてのパーソンセンタード・アプローチ

私はこれまで述べてきたエンカウターの視点から，パーソンセンタード・アプローチについて，いくつかの結論を提案の形で以下のようにまとめておきたいと思う。

パーソンセンタードの基本的要素は，対極のものと一体のもの《私たち》とのあいだの緊迫関係を一方的に解消しないことである。個性を維持しようとするときにだけ，エンカウンターは可能になってくる。エンカウンターは(ひとと同じで)，連続的で創造性のあるひとつのまとまりである。だから融け合っているのではない。別の実体[ootherness]だけれど，掛け橋をつくって歩み寄れないほど離れてはいない。この緊迫関係は耐えている状態である。なんじとわれが互いを見て，向かいあっている[face-to-face]。ちょうど同じ方向の何かをのぞき込むときのように(第三者にひとかもの に対してふたりが顔を向けるように)。そこには，ふたつ以上のこと，違うことがある。そして，そこに仲間意識や一体感があるといえる。

パーソンセンタードすべきことは，目の前にいる他者とのかかわりを通じて，他者を受け入れることである。ロジャーズはそれをとて真剣に受け止め，診断や解釈，階級構造や政治的な煽動という考えから完全に見方を変える形で実行してきた。個人セラピーでは，セラピストがもうひとりの自己[alter ego]をするという一方的な役割を捨てて，クライアントと向かいあって，本当に個人的なかかわりをすべきだ，という結論に至っている。

かかわりあいやエンカウターの視点に立ったとき，互惠性という考え方も実践哲学に入れなければならない。プレゼンスという態度で本気で取り組むことは，われ なんじ関係を互惠的なものにする。互惠性はどの個人的なエンカウンターでも最終的な目標であるから，そうなったとき，パーソンセンタードを実践したと言ってもいいだろう。ロジャーズのアイデアは，つねにある種の相互的なエンカウターのことである。それはまた，そのひとが相互的なセラピーのために一方のひとのところへ行くだろう，ということも意味している。違う立場という結果，非対等な関係にもかかわらず，基本的には対話という性質があるとされる。つまり，パーソンセンタードの実践のためには，セラピストの禁欲的な原則(よく非指示的といわれているもの)を捨てることを意味しているし，それだけでなく，ひととしてオープンでいられる，ということも求めている。それは現実に起きたこと(あるいは起きそうなこと)に対して，ひととして負わされる危険も受け入れるといった特殊な態度のことである。

パーソンセンタードでの発達観として，ひとが関係性を前提として生まれてくる，ということも人格理論に加えるべきである。ひと[person]という概念については 4 章ではっきりとしたことだが，適切に理解するためには，ひとは，自分から何かする性質と互いに影響を受けあう性質をもっていて，それらが衝突しあって生まれるやりとり[dialectic interaction]の中にいる，と考えることが必要である。これは動機づけ[motivation]という考え方にもつながってくる。エンカウターの視点から出発したパーソンセンタードの人間観は，具体的な用語に入り込んでいるし，新

らたなアイデアも発展している。たしかに言われているように、パーソンセンタード・アプローチの人間学のなかでは、ロジャーズ(1959: 196)が仮定した(例えば実現傾向のような)、ひとつの理論だけでなく、エンカウンターに向う人間の潜在性とかかわりへの従属性もまた、パーソンセンタードでの人間像という(かかわりあいの理論を) 疑う余地のない基本的な仮定として考慮すべきであろう。もしロジャーズが言ったように、人間が根っからの社会的な存在[incurably social, Rogers, 1965: 20; Rogers and Tillich, 1966]や社会的な生き物(Rogers, 1953: 103)で、愛と愛着を求めるといふ生まれながらの欲求(Rogers, 1971b)をもっているのだとしたら、現にロジャーズはかかわりあいを前提としている。たとえ理論の形で明確に書き残さなかったとしてもである。人間を動かし、成長させ、変容させた力は、実現傾向、そして《呼びかけた 存在[being-addressed]》、他者による挑戦から、《自己超越[self-transcendence]》(Pfeiffer, 1993: 36)へと向わせるのである。

ロジャーズによる《プレゼンス》の考えは、三条件という基本態度の実存哲学的な根底をなすものである。ロジャーズの記したプレゼンスという現象は、第四条件ではない。純粹性、無条件の肯定的配慮、共感的理解といった基本態度は包括的に示されており、プレゼンスはそこに言い添えられた形の、実存哲学的な方法に含まれる、より深い対話的 個人的なレベルのものである。ロジャーズが《プレゼンス》と呼んだものは、エンカウンター哲学での言い回しであるプレゼンス[Gegenwärtigkeit]に呼応している。パーソンセンタードの態度は、パーソンセンタードの《三個組 - 変数[triad-variable]》(内的つながりのある三変数[variables]が強調された形で)として適切に述べている。このように、弁証法的な観点からとらえると、ヘーゲルが呼んでいる《Aufhebung》の基本態度のことに例えられる。ドイツ語 *aufhebung* の意味#13は、保護すること、廃止すること・解消すること、無用にすること・限界を超えること・評価をを変更することである。もし誰かこれらの意味を一緒に同時に使ったとしたら、《プレゼンス》は *aufhebung* の基本態度と同じように考えられるだろう。無用にすることや限界を超えることによって、もともとのものを保護しつつ、発展的に解消すること。そのように、エンカウンターには《変数以上のもの》という性質がある。この感覚でみると、パーソンセンタードでのかかわりあいの本質的なことは、いずれかひとつの基本態度をとるといふ認識を超えて、お互いにいることについて原理的で広範囲で完全な方法に向っている。パーソンセンタードですることの動機と目標は個人的なエンカウンターであったはずである。だから、プレゼンスは、ロジャーズ(1986)が変性意識状態や自己超越状態とみなしたものだけでなく、《エンカウンターの中にいること[being in encounter]》というあり方とみなせるのである。こうして、プレゼンスは純粹性という表現をとって、直接的にそこにある体験自体の流れとの関連を伝えている(つまりプレゼンスは、わたしの体験自体と象徴化の一致と差異、象徴化とコミュニケーションの一致と差異をはっきりさせるようなものである)。また、プレゼンスは共感という表現で、他者の体験していること自体に関係した、実存的な驚きの中にも伝えている。そして、プレゼンスは肯定的配慮という表現をして、私自身を受け入れること、他者を個人的にわかってあげること(そのひとが直接そこで感じている体験自体も含めて個人的にわかってあげること)も伝えているのである。そのような基本態度は、エンカウンターの条件というふうにも考えられるだろう。

プレゼンスは歴史性[historicity]という考え方への出発点である。ときどきではあるが、精神力動にかかわりのある人たちから批判されることがある。パーソンセンタード・アプローチは、歴史というものを全く配慮していない。そのために、深層心理的ではなく表面的になっているので

はないか。このような批判であれば、その間違いに反論できると思う。プレゼンスには《なってきたこと[having-become]》の意味が含まれているのだから。しかも、未来(例えば、なっていく可能性[possibility of becoming])という概念も含んでいる。だから、今やその疑念はこう言い換えられるべきである。セラピストと同じように、クライアントが新しい方法で自身の未来を思い描き、自身の背負ってきた過去について、いつもそこにある瞬間の直接さに支えられるためには、どのような関係性が必要なのだろうか。この瞬間をカイロス(つかまえるべき絶対的な瞬間を意味するギリシア神の名)になぞらえて考えると、本質的で豊穡な時間の先端《パーソンセンタード・カイロロジー》(Schmid, 1992-3)とみなすことができ、その考えを使えば、プレゼンスが満たされたものか、その状態はどうか、ということを確認することができる。十分なプレゼンスがある状態は、グループワークやセラピーでの適切な意思決定を、適切な瞬間に促すことができる。そして、適切な瞬間、つまり、押しつけではなく、育まれるかそうしそこなうかのどちらか一方の瞬間を手に行けるよう促すのである。

ディアコニア[diakonia, 支援] # 14 としてのパーソンセンタード的ふるまいが、パーソンセンタード的な倫理観の基礎となるだろう。エンカウンターを経験するなかに、意味を見つけ価値を決めるための始まりがみられる。人間はエンカウンターを生み出すことはできないが、かわりに、自身がエンカウンターする何者かであると気づく、という事実を経験している。また、自律性の源泉、つまり、何者かが自身のものとして、自分で価値を選び、価値を決め、価値に気づくようなことが出来事がそこにはある。《外側で[external]》の経験が引き起したにもかかわらず、この《内側で[inner]》確かめることを支えにして、パーソンセンタードの倫理観は深まっていくだろう(Schmid, 1996b: 521-32)。そのようなふるまいを理解する上では、**ディアコニア**という考え方を足がかりにできる。それは、人間が原則として他者に、レビナスの言い方では《先立つもの[priority]》に依存しており、そこに生じた責任の中に、そのような認識の上に成り立っている。古いユダヤ人の格言ではこうである。「なんじ自身のように、隣人を愛せよ」(それは《なんじより》ではなく《なんじのかわりに》でもない。《なんじのように》である。すなわち、《あなたが自身を大切にするとちょうど同じくらいに》であり《あなた自身を大切にすること》という意味である)。それはキリスト教に受け継がれたものであるが、パーソンセンタードのものとしても注目に値する。この視点に立つことで、心理療法は個人的なエンカウンターを可能にする。セラピストはクライアントの苦痛に応じてくれる何者かである。心理療法は倫理的な責任に裏打ちされた、契約[engagement]と連帯意識という支援を提供する。

身体的な特質も心理的な特質とともにパーソンセンタードの考えに含まれるべきだろう。ジェンドリンとその仲間たちはすでに、からだのプロセスに少し注意を向けることを明確に付け加えた。結果的に私たちは、人間の特質[personhood]として彼らの未完のモデルを導入するようになった。からだは、人間性から切り離すことのできない部分だからである。それは、私たちが、心理学的に体験自体と身体が相互作用していることに気づく必要性があり、実践の中でそのような動きをとらえている必要性があるということの意味するだけではなく、人間の特性として《身体心 精神の統一体》[body-psyche-mind-unity](Schmid, 1993; 1994a: 425-502; 1996b: 425-48; 1996c)ということも十分によく表している。その意味で身体もまた必要であり重要なのである。

グループがパーソンセンタード的な経験の原点である。もし人間の条件[*conditio humana*]として、どの人間も最初から自身の経験を重ねるようなグループに生きていた存在だと本気で考える

のであれば、パーソンセンタードでの関係性も、個人の成長と発達が促されるようデザインされたものだったというだけでなく、必然的に、原初的な経験にそったかかわりあいであったということが明確になる。そのため、パーソンセンタードの文脈では、エンカウターの原点はグループなのである。グループの中に1対1の関係(グループの特殊な形態)も埋め込まれている(Schmid, 1996b)。とりわけ、(エンカウター)グループはプレゼンスを学ぶのにとてもよい機会となっている。そのことは、ロジャーズがグループの中でプレゼンスという現象に直面し発見したことと偶然の一致だったわけではない。エンカウターグループはそもそも、個人セラピー以上に、ファシリテーターがひととして巻き込まれることを許すような構造になっている。しっかりと保護された二者関係の治療構造とは異なり、グループはその当初から、すべての参加者が、エンカウターという多様な経験をできるように可能性が与えられている。グループでは、期待していることをすべて向けられるようなひとがいて援助してくれるのではない。だから、参加者はすぐにお互いにサポートしあうことを学ぶことになる。グループワークは経済的に効果的である以上に、時間もお金もかからない埋め合わせの経験となっている。ひとと社会のつながり、セラピーの原点という意味でも、ひとびとが学ぶための適切な空間だといえるだろう 8。

8 パーソンセンタード・アプローチは、(技法としての)個人セラピーとみなされており、時間を経て、ほかの多くの領域に適用され、そのなかにグループワークもあったと伝統的には考えられている。しかし歴史的なものと内容的なもの的一致から、特にヨーロッパでの知識人層の歴史的観点でとらえると、パーソンセンタード・アプローチは社会的アプローチの自然な特質をもっており 根本的にはグループアプローチだと考えられる(Schmid, 1996b, 1996d)。

13 *Aufhebung* {(法律などの)廃止, (会議などの)終了, (哲学)止揚}, 三修社, アクセス独和辞典 web 検索サービス(<http://www5.mediagalaxy.co.jp/sanshushadj/>)。なお、ヘーゲルの止揚 *Aufheben* とは、「A は A 自身を否定する要素(小さな B)を含み、やがて B は大きくなり、AB は対立する。そして必然的に両者の統合状態 C になる。C は AB がより高められて統合したものであり、発展的に解消されながら違った形で AB の内容も保管されている」(高間直道『哲学用語入門』大和書房を参照)

14 *diakonia* ディアコニア, 仕えることを意味するギリシア語